

【特典台本】

あなたの事が大好きなサキュバスメイドが
媚び媚びオネダリご奉仕してくれる生活

	トラック01 プロローグ
リリム	「神話において、神は世界を3つの区画に分け、そこに命を生み出しました」
リリム	「一つは天界。天使が住まう、天上の世界」
リリム	「一つは人間界。人間が住まう、地上の世界」
リリム	「一つは魔界。悪魔が住まう、地下の世界」
リリム	「このように世界が分かれたから数万年後」
リリム	「魔界に住まうお嬢様が一人、興味本位で人間界に旅立ち、行き倒れてしまいました」
リリム	「それも当然です」
リリム	「人間界には悪魔が生きる為の栄養となる『魔素』がないのですから」
リリム	「しかし、魔素が無くても人間界で生きる方法があります」
リリム	「その方法とは、人間から生命力を分けてもらう事です」
リリム	「人間には、生命活動を維持する以上の余分な栄養を、排泄物として体外に排出する習性があります」

リリム

「つまり、人間の出す恥垢や体液、特に精液が固まって出来たチンカスには生命力が豊富に宿っており、悪魔にとってはこの上ないご馳走なのです」

リリム

「そしてこの行き倒れた悪魔のお嬢様であるわたくし、リリムは」

リリム

「偶然助けてくださったあなた様、ご主人様からチンカスをいただくお返しに、メイドとしてこの身を捧げる主従契約を交わしたのでした♪」

	トラック02
リリム	「は〜い♪ ご主人様〜♪ 朝ですよ〜♪ ん〜、ちゅ♪ ちゅ、ちゅ♪」
リリム	「んもう♪ 朝が苦手な悪魔よりもお寝坊さんだなんて♪」
リリム	「流石はご主人様♪ ひ弱な人間の癖に良いご身分ですね♪」
リリム	「まあご主人様は命の恩人ですから、これ以上とやかく言うつもりはありませんが……」
リリム	「いいんですか？ わたくし、今すっごくお腹が空いてるんですよ？」
リリム	「もしこのまま寝ているようでしたら〜……」
リリム	「悪魔らしく、ご主人様をいただいてしまいますよ？ 性的に♪」
リリム	「つて、あん♪ ふふ♪ おはようございます♪ ご主人様♪ ん〜ちゅ♪ ちゅ、ちゅ♪」
リリム	「昨夜もあんなに激しく愛し合ったというのに、ちゃんと起きられて偉いですね〜♪ は〜い♪ 偉い偉〜い♪」
リリム	「ご褒美に、ご主人様の事がだ〜い好きなメイドのお♪ なが〜いベロでえ♪」

リリム

「お耳」奉仕♪ して差し上げますね♪」

リリム

「ほくら♪」「主人様」♪ おふあよう」「ざいま
ふ♪」

リリム

「んれるろれろれろれろ♪」

リリム

「んちゅ♪ ふふ♪ あらあら♪」「主人様？」

リリム

「たった一晩でこんなに耳カスを溜められるだ
んて♪」

リリム

「ご主人様はとつても不潔でございますね♪」

リリム

「ですが、わたくしは悪魔ですので♪ ご主人様
の生命力がたっぷり詰まった耳カスは大好物で
す♪」

リリム

「このまま耳カスを……ん♪ くちゅくちゅ♪
お口の中でぐちゅぐちゅに溶かしてえ♪」

リリム

「ん……くちゅくちゅくちゅくちゅ♪ ふふ♪
「ご主人様の耳カス♪ いただいちゃいまふ
ね？」

リリム

「ん……」「く♪」「く♪」「く♪」「く♪」

リリム

「んる♪ ぷはあ♪ はあ、はあ♪ ん、ああん
♪」

リリム

「ご主人様の耳カス美味しい♪」

「はあゝ♪ もつとゝ♪ ご主人様のお耳掃除の
ついでにい♪ 耳カス♪ いただいちゃいます
♪」

「はあゝむ♪」

「ん？ ふふ♪ ご主人様？ そんなにお体を震
わされて、もしかして感じていらっしやるん
ですか？」

「そんなあ♪ わたくしはただ良かれと思ってご
主人様のお耳を掃除してあげてるだけですの
に♪」

「んもう♪ ご主人様のお♪ 変態さん♪」

「メイドのご奉仕で発情しちゃう変態ご主人様に
はお仕置きです♪ そゝれ♪ お耳の奥までえ
♪」

「はあゝゝ……む♪」

「んゝ……ぷはあ♪ はあ、はあ♪」

「ふふ♪ ご主人様ゝ♪ 見えますか？ こゝち
ゝら♪」

「ご主人様のねっとりと黄ばんだ……くっさゝい
み・み・カ・ス♪」

「ん……ちゅ♪ ふふ♪ このまま」つくんさ
せていただきますね？」

「はあゝむ♪ くちゅくちゅくちゅくちゅく
ちゅくちゅくちゅくちゅ♪」

「ん♪ ごく♪ ごく♪ ごく♪ ごく♪」

「ん、ぷはあゝ♪ はあ、はあ……ああゝん♪」

「ご主人様の耳カスくっさゝゝい♪ はあゝ♪
くっさ♪ 耳カスくっさゝゝ♪」

「って、あらあら♪ 申し訳ありません♪ あま
りの臭さに、思わず下品な言葉遣いをしてしま
いました♪」

「ですが、ご主人様の耳カスが臭いというのは本
当です♪」

「こんな臭い物を耳の中に入れては病気に
なってしまうから」

「わたくしの唾液でしっかりと耳カス洗い、させ
ていただきますね♪」

「はあゝむ♪」

「ん、ちゅ♪ ふふ♪ ご主人様♪ お疲れ様で
した♪」

「こちらのお耳はひとまず置いておいて……続いては……こゝちゝら♪」

「ご主人様の愛らしい右耳に♪ 失礼致します♪」

「はあゝむ♪」

「ぶはあ♪ ん、ああん♪ ご主人様あ♪」

「もう♪ こちらのお耳にも耳カスを溜められてえ♪」

「はふう♪ ふふ♪ またお口が耳カスでいっぱいになってしまいましたあ♪」

「んゝ……はあゝゝゝゝゝゝゝ♪ 分かりますか？ わたくしの口臭♪ ご主人様の耳カスのせいで臭くなっていましたたよお？」

「んゝ♪ 耳カスう♪ ご主人様のくっさゝい耳カスうゝ♪」

「んふう♪ くっさッ♪ 耳カスクっさッ♪」

「はあゝ♪ くっさ♪ 耳カスクッさ……♪」

「このくっさゝい耳カスをゝ♪ お口の中でこね回してゝ……」

「ふふ♪ はあゝ♪ くっさ♪ 耳カスくっさあゝ♪」

「仮にもお嬢様のわたくしにこゝんなくっさい耳カスを食べさせるだなんてえ♪ ご主人様ってば最低すぎますう♪」

「んちゅ♪ れろろろ♪ んはあゝ♪ くっさ♪ ふふ♪ くっさ♪ くっさ♪」

「はあゝむ♪」

「ぷはあ♪ はあ、はあ……」

「んもう♪ お耳の奥にこゝんな大きな耳カスが溜まつてるだなんて♪」

「耳の奥で蒸らされて黄ばんだ、臭くて最低の汚れ♪」

「しっかり味わわせていただきますね♪」

「ん、あむ♪ くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ♪」

「んゝ♪ ぐゝゝ♪ ぐゝゝ♪ ぐゝゝ♪ ぐゝゝ♪」

「ん、ぷはあ♪ はあ、はあ♪ んほ♪ おゝおゝゝ♪」

「これえ♪ この味い♪ ご主人様の排泄物の
味い♪ ああん♪ この臭さが溜まりません
♪」

「こんなの抑えられないです♪ 下品な声……ん
ほっ♪ 、お♪ 、おおん♪ 抑えられません
よお♪」

「んほお♪ 、お♪ 、お♪ 、お♪ 、お♪」

「はあ、はあ……んふふ♪ ご主人様あ♪ わた
くしの下品なオホ声え♪ もっと聞きたいです
かあ？」

「いいですよお♪ わたくしの得意な念話魔法
でえ♪ 両耳からいっぱい下品な声を聞かせて
差し上げますう♪」

「さあ♪ ご主人様あ♪」

「耳舐めされながらの囁きオホ声♪」

「楽しんでくださいませ♪」

「楽しんでくださいませ♪」

「んほお♪ ご主人様あ♪ 愛しのご主人様あ
♪」

リリム B

「もっとわたくしの下品な声で感じてください
♪」

リリム B

「はあゝむ♪」

リリム A

「んほお♪　お♪　お♪」

リリム A

「ああん♪　今度はこっちのお耳でオホ声出ちや
いますう♪　んほお♪」

リリム A

「んほお♪　お♪　お♪　んふう♪　ご主人
様あ♪」

リリム A

「ご主人様の耳カス大好きですう♪　くっさい耳
カスう♪　汚い耳カスう♪」

リリム A

「はあ、はあ♪　ご主人様あ♪　んゝちゅ♪　れ
ろれろ♪　んふふ♪」

リリム A

「ああ♪　しゆきい♪　しゆき♪　しゆき♪
しゆき♪　しゆきい♪　んほお♪」

リリム A

「はあゝむ♪」

リリム B

「ふはあ♪　はあ、はあ♪　ご主人様あ♪」

リリム B

「最後に仕上げとしましてえ♪　思いつきり耳の
中をれろれろして差し上げますねえ♪」

リリム A	「ん、ぷはあ♪ はあ、はあ♪ んふふ♪ 両耳をメイドに犯される喜び♪ 存分にご堪能くださいませ♪」
リリム B _♯	「ご主人様あ♪ はあ〜〜……む♪」
リリム A _♯	「ご主人様あ♪ はあ〜〜……む♪」
リリム B _♯	「ん〜……ぷはあ♪ はあ、はあ♪」
リリム A _♯	「ん〜……ぷはあ♪ はあ、はあ♪」
リリム B	「ふふ♪ ご主人様あ♪ このまま左右で同時にい〜♪」
リリム A	「耳カスごつくん♪ させていただきますね♪」
リリム B _♯	「あむ♪ くちゆくちゆくちゆくちゆ♪ くちゆくちゆくちゆくちゆ♪」
リリム A _♯	「あむ♪ くちゆくちゆくちゆくちゆ♪ くちゆくちゆくちゆくちゆ♪」
リリム B _♯	「ん♪ ごく♪ ごく♪ ごく♪ ん、ぷはあ♪ はあ、はあ♪」
リリム A _♯	「ん♪ ごく♪ ごく♪ ごく♪ ん、ぷはあ♪ はあ、はあ♪」
リリム B	「ふふ♪ 臭くて下品で厭らしい、最ッ低の耳力スジュース♪」

リリムA	リリムB	リリムA
「んゝ、ちゅ♪」	「んゝ、ちゅ♪」	「ご馳走様でした♪ ご主人様♪」

	トラック03
リリム	「ああん♪ ご主人様ったらあ♪ こんなにおちんぽ様を勃起させられてえ♪」
リリム	「そんなにわたくしの耳カスごっくんがお気に召したのですかあ？」
リリム	「ふふ♪ いいですよ？」
リリム	「おちんぽ様が元気になられたという事は、それだけお金玉に生命力が蓄えられているという事ですから♪」
リリム	「ん……ああん♪ すっごく大きなお金玉♪」
リリム	「ここにわたくしの食事が詰まっているんですね♪」
リリム	「ん、ごく♪ ふふ♪ 思わず生唾を飲み込んでしまいました♪」
リリム	「それでは早速♪ こちら♪」
リリム	「ご主人様のチンカスおちんぽ飯♪ お口でいただかせていただきますね♪」
リリム	「ん、しょ……っと♪」
リリム	「ああん♪ 目の前にするとより強く感じられます♪」

リリム 「これがおちんぼ様の熱♪ おちんぼ様の匂い♪」

リリム 「すうぅぅ……はぁぅぅぅ……♪ ん♪ あぁん♪ おちんぼ様あ♪ んぅ……ちゅ♪ちゅ、ちゅ♪」

リリム 「こんなに逞しく勃起されているのにチン皮から出てこられない、情けなぅい包茎おちんぼ様♪」

リリム 「はぁぅ♪ いつ見ても可愛らしい♪ んぅ……ちゅ♪ ふふ♪ 愛しい愛しい包茎おちんぼ様♪」

リリム 「さぁ♪ どうかその可愛らしいチン皮に隠された、くさぅぅいチンカスを食べさせてくださいませ♪」

リリム 「そおれ♪ チン皮ムキムキ♪ チン皮ムキムキぅぅ♪」

リリム 「やぁん♪ ご主人様のチン皮剥けちゃいましたぅ♪」

リリム 「ああ♪ 何て愛らしいおちんぼ様なのでしょう♪」

リリム 「おちんぼ様の先っぽにも♪ 裏スジにも♪ カリ首にも♪」

「蒸れて黄ばんだくツさゝいチンカスがいゝっ
ぱい張り付いておられますう♪」

「はあゝ♪ 腐ったチンカスがこんなに沢山♪
んゝ……スン♪ スンスン♪」

「ん、お♪ 、お♪ 、おゝゝ♪」

「これえ♪ これが欲しかったんですう♪」

「人間の生命力を凝縮させた、極上のチンカスう
♪」

「んほっ♪ 、お♪ 、おお♪」

「やあん♪ もう我慢できません♪」

「ご主人様？ こちら♪ ご主人様のチンカス飯
♪ いただきますね♪」

「はあゝゝ……むう♪」

「ぷはあ♪ はあ、はあ♪ やあん♪ お口の中
がチンカスでいっぱいですう♪」

「大好きなご主人様のチンカスでお口を満たせる
だなんて、こんなの幸せすぎますう♪」

「……って、ああん♪ 申し訳ありません♪」

リリム 「わたくしだけチンカスを楽しんでいてはご主人様も面白くありませんよね？」

リリム 「そうです！　せっかいですからこのように♪
…♪」

リリム A 「わたくしがいかにご主人様のチンカスが好きかを念話でお伝えしながら♪」

リリム B 「チンカスおちんぽ飯をいただきかせていただきますね♪」

リリム 「ふふ♪　それでは♪」

リリム ♪ 「ご主人様のチンカス♪　いただきま〜す♪
はあ〜む♪」

リリム A ♪ 「ご主人様のチンカス♪　いただきま〜す♪
はあ〜む♪」

リリム B ♪ 「ご主人様のチンカス♪　いただきま〜す♪
はあ〜む♪」

リリム A 「ふふ♪　ご主人様のチンカス美味しいですう
♪」

リリム A 「特に♪　おちんぽ様の先っぽに張り付いた出来立てホヤホヤのチンカスう♪」

「とめどなく溢れる我慢汁と混じり合って、まるでスープのようにごくごく飲めちゃいますね♪」

「ああむ♪」

「ああん♪ でももお♪ こゝこ♪ おちんぼ様のカリ裏に隠れた熟成チンカスも負けてませんよ？」

「カリの裏側は上手く洗えないですから、何日も放置されたチンカスが溜まっています♪」

「ベロでコスコスする度に米粒のような特大チンカスがお口の中に転がってきますう♪」

「その様はまるで飴ちゃんのように……まあ飴と違ってとっても臭いんですけど♪」

「んふふ♪ はあむ♪」

「んゝ♪ 確かにカリ裏の特大チンカスも素晴らしいですけどもお♪」

「やはり一番はこちら♪ 裏筋でベツトリ張り付いているチンカスチーズですね♪」

「このチンカスチーズをひと舐めするだけで……んほお♪、お♪、おおん♪」

リリム A

「思わずオホ声を上げてしまう程の臭みと刺激♪」

リリム A

「ああん♪ チンカスチーズくっさ♪ ご主人様のチンカスチーズ臭すぎますう♪」

リリム A

「でもでもお♪ どれだけ臭くて下品な味でもお♪ チンカスを舐める舌を止められません♪」

リリム A

「ご主人様のチンカスはきつと、世界で一番臭くて下品な♪ 最低で、最高のチンカスですよ♪」

リリム A

「はあむ♪」

リリム B

「ん？ ふふふ♪ ご主人様？ そんなに腰をへこへこされてどうされたのですか？」

リリム B

「もしかして……そろそろ、チンカスザーメン♪ ぴゅっぴゅしたくなってきましたか？」

リリム A

「あらあらまあまあ♪ ご主人様ってば、もうイキそうになられるだなんて、本当に堪え性のない残念おちんぽですね♪」

リリム B

「それならば、わたくしもご主人様のチンカスザーメンを零さないように♪」

リリム A

「もっと喉の奥の奥まで♪ 深く深く、おちんぽ様を啜えてさしあげますね♪」

リリム
「ん、ぷはぁ♪ はぁ、はぁ……♪ ふふ♪ それではご主人様♪」

リリム A
「メイドの下品で汚らしいイラマチオご奉仕で」

リリム B
「最高に気持ちのいいおちんぽぴゅっぴゅをして
くださいませ♪」

リリム
「はぁ……む♪」

リリム A
「はぁ……む♪」

リリム B
「はぁ……む♪」

リリム A
「あぁん♪ ご主人様ってばとっても気持ちよさ
そうなお顔お♪」

リリム A
「そんな愛らしく喘がれては、わたくしも嬉しく
なってしまうすう♪」

リリム A
「あう♪ ご主人様ぁ♪ 愛しのご主人様あ
♪」

リリム A
「好きです♪ 大好きです♪ ふふ♪ はい♪
愛しておりますよ♪ ご主人様♪」

リリム A
「はぁむ♪」

リリム B
「ふふ♪ わたくしの喉奥はいかがですか？」

リリム B 「ザラザラでなが〜いベロの上を通して、喉の奥にコンコンっとノックされて♪」

リリム B 「ふふ♪ とっても気持ちのいい喉マンコでしょう？」

リリム B 「わたくしのようなお嬢様の喉をこのように犯していいのはご主人様だけなのですから♪」

リリム B 「どうぞ存分にわたくしを犯し、気持ちのいいおちんぽぴゅっぴゅをしてくださいませ♪」

リリム B 「はあむ♪」

リリム A 「ふふ♪ ご主人様にしてはよく我慢できた方ではありますが、そろそろ限界みたいですね♪」

リリム B 「いいですよ？ ご主人様の為に、わたくしがお射精のサポートをして差し上げます♪」

リリム A 「このまま耳元でカウントダウンをしてさしあげますので」

リリム B 「カウントがゼロになると同時に、おちんぽぴゅっぴゅを致しましょう♪」

リリム A 「それではご主人様？」

リリム B 「いきますよ〜？」

リリム A	「じゅーう♪ きゅーう♪ はーち♪ なーな♪ ろーく♪ ーーお♪ よーん♪ さーん♪ にーい♪ いーち♪」
リリム B	「じゅーう♪ きゅーう♪ はーち♪ なーな♪ ろーく♪ ーーお♪ よーん♪ さーん♪ にーい♪ いーち♪」
リリム A _{8a}	「ぜろ♪ ぜろ♪ ぜろ♪ ぜろーーーーー ー♪」
リリム B _{8a}	「ぜろ♪ ぜろ♪ ぜろ♪ ぜろーーーーー ー♪」
リリム A ₅	「はーい♪ おちんぽぴゅっぴゅ♪ おちんぽ ぴゅっぴゅーーー♪」
リリム B ₅	「はーい♪ おちんぽぴゅっぴゅ♪ おちんぽ ぴゅっぴゅーーー♪」
リリム	「んー？ んぶぶうーーー…んぶぶ」
リリム	「んぶ♪ んぶう♪ んぶっ…んべ♪ ーべ♪ ーべ♪ ーべ♪」
リリム	「んべ♪ ーべ♪ ーべ♪ ーべ♪ ーべ♪」
リリム	「じゅぶぶ……じゅるじゅる……ん、んーぶ はあ♪ はあ、はあ、はあ……はぶうー…… ♪」

リリム 「ふふ♪ ご主人様のこってりザーメン♪ ご馳走様でした♪」

リリム 「これだけ美味しいザーメンをいただけましたので、暫くは空腹をしのげそう……って、あら？」

リリム 「あらあらまあまあ♪ ご主人様ってば♪ あんなにぴゅっぴゅされたのにまだ大きく勃起されて♪」

リリム 「ご主人様あ♪ こんなに素敵なおちんぽ様を見せつけられては……わたくし……ん♪ ああん♪」

リリム 「もうダメです♪ 我慢の限界ですう♪」

リリム 「んっ♪ はあ、はあ♪ ん♪ ご主人様あ……♪」

リリム 「ご主人様がイケナイんですよお？ ご主人様が素敵すぎるからあ♪」

リリム 「このままわたくしの小悪魔おまんこで♪ ご主人様をいただきますね♪」

	トラック04
リリム	「さあご主人様？ どうぞ♪ わたくしのおまんこをよく見てください♪」
リリム	「ふふ♪ この前掛けエプロンをたくし上げて、ちよこっとパンツをズラせば♪」
リリム	「ほくら♪ お嬢様メイドのお上品なおまんこのお披露目です♪」
リリム	「つて、ご主人様あ♪ ふふ♪ とっても鼻息が荒くなって……」
リリム	「ああん♪ やっ♪ ちょっと、ん♪ 鼻息が当たってくすぐったいですよお♪」
リリム	「んる♪ ふふふ♪ もう何度もセックスしてきたというのにこの反応♪」
リリム	「ご主人様ってば可愛らしすぎますう♪」
リリム	「ああ……♪ 好きい♪ ご主人様あ♪ 大好きですう♪」
リリム	「最初はご主人様のチンカスをいただく代わりにご奉仕する、そんな契約から始まった関係ですけども♪」
リリム	「わたくし、今ではすっかりご主人様の虜になっ てしまいましたあ♪」

リリム 「チンカスを食べる食べないなんて関係ありません♪」

リリム 「今はただ、ご主人様と繋がりたい♪ ご主人様を喜ばせてあげたい♪」

リリム 「……ご主人様をわたくしだけのご主人様にしたい♪」

リリム 「その想いだけでわたくし……おまんこがトロトロになってしまっているんです♪」

リリム 「ああ……♪ ご主人様あ……♪ ん……ちゅ♪
ちゅ、ちゅ♪」

リリム 「お願いします……♪ どうかわたくしの気持ちを……♪ わたくしの愛を……♪」

リリム 「この濡れそぼったおまんこから感じ取ってくださいませ……♪」

リリム 「んあ……♪ ご主人様あ……♪」

リリム 「分かりますか……？ ご主人様のチンカスとわたくしのマンカスがキスしちゃって……ん、ああん♪」

リリム 「ぐちゅぐちゅって厭らしい音を立てながら……ん♪ わたくしの中に入ってきますう♪」

「ん♪ あ♪ はい♪ どうぞ♪ お腹の中に来
てください♪」

「ご主人様のチンカスおちんぽ様でえ♪ このお
まんこはご主人様だけのおまんこなのだと、子
宮にワカらせてくださいませえ♪」

「ん♪ あ♪ んほ♪ 、おお♪ クるう♪ お
ちんぽ様あ♪ んほお♪ クる♪ おちんぽ様
くるう♪」

「ん、お♪ 、お♪ 、お♪ 、お♪ 、お♪ 、お♪
、お♪ 、お♪ 、お、お、う、う♪」

「んっつきゅううううううううううッ♪」

「ふはあ♪ はあ、はあ……んほ♪ 、お♪ 、お
うう♪」

「んふう♪ ふう、ふうう……♪ ふふ♪ 流石
はご主人様♪」

「とっても素敵なおちんぽ挿入で……ん♪ わた
くし、思わず甘イキしてしまいましたあ♪」

「はあ、はあ……んちゅ♪ ちゅ……ちゅ♪ ん
♪「ご主人様あ♪」

「おちんぼ様を迎い入れて早々申し訳ないのですが、このままおまんこピストン、始めさせていただきますね？」

「それでは、イキます……ん、ああんッ♪」

「ん♪ ご、ご主人様あ♪ ん♪ あん♪」

「やん♪ ご主人様のおちんぼピストン♪ とつても気持ちいいです♪」

「ん♪ あ♪ あ♪ あ♪ ああん♪」

「わたくしのおまんこにい♪ ご主人様のチンカスコスコスされてえ♪」

「んほお♪ お♪ お♪ おろ♪ やあ♪ ご主人様ご主人様あ♪」

「もっとコスコスしてください♪」

「ご主人様のチンカスでえ♪ わたくしのおまんこをメスにしてくださいませえ♪」

「ん♪ ああん♪」

「ん♪ あ♪ ん♪ ふふ♪ ご主人様ってばあ♪」

「そんなに気になりますかあ？ わたくしのデカチチ♪」

「ん♪ あ♪ はい♪ わたくしの胸はあ♪ 魔
界で一番下品に垂れ下がったあ、自慢の長乳な
んですよお？」

「今もお♪ ん♪ ああん♪」

「このようにい♪ おまんこパンパンする度にい
♪ 下品にぶるんぶるん飛び跳ねてえ♪ んほ
お♪」

「お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪
お♪ お♪」

「これえ♪ 凄いですう♪ 下品にパンパンっ
てえ♪ んほ♪ お♪ お♪」

「デカチチ揺らすの止まりません♪ 下品な声が
止まりません♪」

「ご主人様あ♪ ご主人様あ♪」

「お願いしますう♪ おちんぽ様でおまんこホジ
ホジしながらでいいので♪」

「どうかわたくしのデカチチを虐めてください
♪」

「下品に垂れ下がった情けないデカチチを♪」

「ご主人様の両手で揉んで、抓って、弄んでくだ
さいませえ♪」

「んあ♪ あ♪ あ♪ あ……って、んほおお
ッ♪」

「やつ♪ ご、ご主人さ……んほお♪ お♪
お♪ お♪ お♪ お〜♪」

「そ、それえ♪ しゅごいれしゅう♪」

「わたくしのおっぱいッ♪ ご主人様に掴まれて
ましゅ♪」

「んほお♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お
♪ お♪ お♪ お♪ お〜♪」

「はい♪ このデカチチはご主人様の物ですう
♪」

「ご主人様だけのデカチチオナホールですう♪」

「んひい♪ やあ♪ ご主人様あ♪」

「そこお♪ 乳首い♪ んやあ♪」

「だ、ダメえ♪ おっほおお♪」

「馬鹿になりますう♪ 頭馬鹿になっちゃいま
すう……♪」

リリム

「お♪、お♪、やあ♪ 見ないでください…
…♪ こんな下品な顔お…♪ 見ないでえ…
…って、んほおお♪」

リリム

「お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪
お♪、お♪」

リリム

「やあ♪ ご主人様の意地悪う♪」

リリム

「ですがあ♪ そんなご主人様も好きですう♪
愛しておりますう♪」

リリム

「んほお♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お
♪、お♪、お♪、お♪」

リリム

「どうかあ♪ このままわたくしの頭をおかしく
してください♪」

リリム

「わたくしの長〜いデカチチもお♪ 下品なおま
んこもお♪」

リリム

「ご主人様だけの物にしてくださいませえ♪」

リリム

「んほおおおッ♪」

リリム

「お♪、お♪、お♪、お♪、おおん♪」

リリム

「やあ♪ おちんぽ様あ♪ おちんぽ様♪ おち
んぽ様♪ おちんぽ様あ♪」

リリム 「ん♪ ああん♪ は、はい♪ もう限界ですう
♪」

リリム 「ご主人様のおちんぽ様でえ♪ イっちゃいま
すう♪ おまんこイっちゃいますう♪」

リリム 「んほおおお♪ お♪ お♪ お♪ お♪ おくく
♪」

リリム 「ご主人様あ♪ お願いしますう♪」

リリム 「わたくしと一緒にいてくださいませえ♪」

リリム 「大好きなご主人様と一緒にイキたいんです♪」

リリム 「愛しいご主人様と一緒にい……♪ んほおおお
お♪」

リリム 「お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪
お♪ お♪」

リリム 「お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪
お♪ お♪」

リリム 「お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪
お♪ お♪」

リリム 「お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪
お♪ お♪」

「んほおお♪ おまんこイグう♪ デカチチ揺
らしておまんこイグううう♪」

「おおおお♪ イグイグイグイグイグイ
グイグうううう♪」

「おまんこイッッぎゅうううううううううう
うううううううううう♪」

「んッッほおおおおおおおおおおううううう♪」

「おほおおううう♪ お♪ おおううう♪」

「出てますう♪ ご主人様のチンカスザーメン
う♪」

「んぶうう……♪ お♪ おおう♪」

「ああ……ご主人様あ♪ はあ、はあ……♪」

「ん♪ お口だけでなくお腹にも直接チンカスを
注いでくださるだなんてえ……♪」

「やはり、ん♪ ご主人様にお仕えして正解でし
た……♪」

「ふふ♪ ご主人様あ♪ ん……ちゅ♪ ちゅ♪
ちゅ♪」

「はい♪ 好きです……♪ 大好きです……♪」

リ
リ
ム

「んちゅ♪
ちゅ、
ちゅう〜…………ちゅ♪
」

	トラック05
リリム	「ご主人様あ♪」
リリム	「実はわたくし、ご主人様をお願いしたい事があるんです♪」
リリム	「……ふふ♪ ご安心ください♪ そんなに難しい事ではございませんので♪」
リリム	「実は先日、ご主人様が大切に保管されているエッチな本を読んでいた際に気になるプレイがございましたので、それを実践してみたいのです♪」
リリム	「……そう♪ そのプレイとは……」
リリム	「……アナルセックス♪ より下品な言い方をすれば……ケ・ツ・ハ・メ♪ していただきたいのです♪」
リリム	「本来であれば、ウンチをブリブリひり出す為の汚ならしい穴でしかありませんが……」
リリム	「まさかケツ穴で愛し合うプレイがあるなんて……ふふ♪ 人間の性欲は計り知れませんね♪」
リリム	「……それでご主人様？ いかがでしょう？ わたくしのケツ穴でセックス♪ してみませんか？」

「……ああん♪ 流石はわたくしのご主人様♪
そう言っていただけだと信じておりました♪」

「それでは早速♪ ご主人様のおちんぽ様で、こ
ちら♪」

「チンカス欲しさにヒクヒク震えている、メイド
のケツ穴を♪」

「ご主人様とエッチする為のメス穴に変えてくだ
さいませ♪」

「ん……あん♪ ご主人様あ♪ んぶう♪ お
♪、お♪、お♪、お……♪」

「ぐう♪ く、来るう♪ チンカスおちんぽ様
があ♪ んぶう♪ ケツ穴にい♪ ミチミチつ
て入って来ますう♪」

「んほおお♪ んる♪ ああん♪ ご主人様あ♪
ふう♪ ふう♪」

「はいい♪ いっぱい見てください♪ ガニ股ウ
ンチ座りでケツ穴を広げる下品な姿あ♪」

「ながるく垂れ下がったデカチチを揺らしながら
チンカスをねだる浅ましい姿あ♪」

「んほおお♪ さあ♪ ご主人様あ♪」

リリム 「きちんと綺麗にしてきたのですが……ん♪ オ
ナラが出てしまいましたあ……♪」

リリム 「少しお待ちくださればお腹の調子も戻ると思
いますので、今暫くお待ちを……」

リリム 「って、んほおおおッ~~~~~!?!」

リリム 「んほっ♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お
♪、お♪、お♪、お♪、お♪」

リリム 「お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪
、お♪、お~~~~♪」

リリム 「そ、そんなッ♪、ご主人様ッ♪ いきなり腰を
パンパンされては♪、んほおお♪」

リリム 「お♪、お♪、お♪、お♪、お~~~~♪」

リリム 「これえ♪ また出るう♪ ブリブリってくっさ
いオナラ出ちゃいますう♪」

リリム 「んほおおお♪ 出る出る出る出るう♪ 下品
な音出るう~~~~♪」

リリム 「んほおおおおおお~~~~♪」

リリム 「んぐ~~~~♪ やあ♪、お♪、お♪、お
♪、お~~~~♪」

リリム 「申し訳ございません♪ メイドの癖にケツ穴ア
クメして申し訳ありません♪」

リリム 「ですがあ♪ こんな素敵なケツハメされたらあ
♪ 我慢なんて出来ませんよお♪」

リリム 「そうですう♪ わたくしがケツ穴で感じるの
もお♪ ご主人様のチンカスが大好きなのもお
♪」

リリム 「全部ぜんぶご主人様が悪いんですう♪」

リリム 「ですからあ♪ んほおお♪ はいいい♪ 責任
をもつてえ♪ わたくしのケツ穴を犯してくだ
さいい♪」

リリム 「ご主人様だけのお♪ 都合のいいケツ穴メイド
にしてくださいませえ♪」

リリム 「んほおおおッ♪♪」

リリム 「んぐう♪ やあ♪ もうダメですう♪」

リリム 「ケツ穴でイグう♪ イっちゃいますう♪ ご主
人様のチンカスおちんぽ様でケツ穴アクメイッ
ちやいますう♪」

リリム 「んおおお♪ やあ♪ ケツ穴イグう♪ ケ
ツ穴アクメすりゅう♪」

リリム

「おおおお♪ イグイグイグイグイグイグ
イグ♪ イグイグイグイグイグイグイグ
〜♪」

リリム

「ケツ穴イッツッぐううづづづうううう
〜♪」

リリム

「んっほおおおおお〜〜〜ッ♪」

リリム

「お♪ 、おおおおお♪」

リリム

「ん、お♪ 、お♪ イグう……♪ ケツ穴いつて
ますう〜♪」

リリム

「って、んほお♪ やあ♪ これ、また出ますう
♪」

リリム

「くっさいオナラあ……♪ メイドが出しちゃい
けない下品なオナラあ……♪」

リリム

「おほお〜♪ 出るう♪ 出る出る出る出
るう♪ ん、っぎゅうううづづづ〜♪」

リリム

「んっほおおおお♪ 、お♪ 、おほおおお♪」

リリム

「これえ♪ ああん♪ 、お♪ 、お〜♪」

リリム

「はあ、はあ……♪ またオナラを出してしま
いましたあ……♪」

リリム 「それにい♪ ケツ汁も一緒に漏れ出てしまっ
てえ♪」

リリム 「ああん♪ ご主人様あ♪ 汚い姿をお見せして
しまい、申し訳ございません……」

リリム 「て、んほおおおろろろッ!？」

リリム 「ん、お♪、お♪、お♪、お♪、おろろ♪」

リリム 「やあ♪ ご主人様あ♪ さつきよりも激しいで
すう♪」

リリム 「んほお♪、お♪、おおん♪」

リリム 「お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪
、お♪、おろ♪」

リリム 「このままではあ♪ ご主人様に気持ちよくさ
れっぱなしになってしまいますう♪」

リリム 「メイドとしてえ♪ ただケツ穴を穿られ、喘い
でるだけ何てえ♪ 許されませんのでえ♪」

リリム 「はあ、はあ♪ 今回もお♪ わたくしの得意な
念話魔法でえ♪ んほおお♪」

リリム A 「ご主人様の両耳を舐めながらあ♪」

リリム B 「最高のケツハメ体験を、ご主人様に味わって
いただきますね♪」

リリム A_二

「はあゝむ♪」

リリム B_二

「はあゝむ♪」

リリム A

「ふふ♪ ほおら♪ ご主人様あ？ 見てくださ
い♪」

リリム A

「今もご主人様にケツ穴をホジホジされてイキ
狂っているオリジナルのわたくしを♪」

リリム A

「あんなにおん♪おん♪って喘ぎながら腰を振っ
ちやってますよお？」

リリム A

「ああん♪ ピチャピチャとケツ汁まで噴き出し
てしまっ♪」

リリム A

「ふふ♪ 何て下品で臭そうなケツ穴なのでしょ
う♪」

リリム A

「我ながらお恥ずかしい限りです♪」

リリム A

「はあむ♪」

リリム B

「ですがゝ♪ ご主人様はああいう下品なメイド
もお好きでしょう？」

リリム B

「自分だけのメイドを部屋に連れ込み、一晩中犯
し♪ 弄んで♪ オナホールのように使い倒し
たいのでしょうか？」

リリム B 「ああん♪ 可愛い見たい目に反して、とっても鬼畜なご主人様♪」

リリム B 「……いいですよ？ ご主人様の黒い欲望を、全てわたくしにぶつけてください♪」

リリム B 「わたくしのハムのように肥えた太ももを揉みしだきながら、思いっきりケツ穴を犯して……」

リリム B 「わたくしのケツ穴を……ご主人様だけのオナホールにしてくださいませ♪」

リリム B 「はあむ♪」

リリム A 「んふふ♪ ご主人様ってば♪ ケツ穴の中でも分かります♪」

リリム A 「……そろそろ出ちゃいそうなのですね？」

リリム A 「お金玉に溜められたくっさいチンカスザーメン♪」

リリム A 「わたくしのケツ穴にドピュピュって出しちゃいたいんですね？」

リリム B 「ふふ♪ それではわたくしのカウントダウンにあわせて一緒にイキましょう♪」

リリム B 「両耳から同時に数えますので、よくよく聴いててくださいね？」

リリムA.

「それでは♪ いきますよう?」

リリムB.

「それでは♪ いきますよう?」

リリムA.

「じゅーう♪ きゅーう♪ はーち♪ なーな♪
ろーく♪ ごーお♪ よーん♪ さーん♪
にーい♪ いーち♪」

リリムB.

「じゅーう♪ きゅーう♪ はーち♪ なーな♪
ろーく♪ ごーお♪ よーん♪ さーん♪
にーい♪ いーち♪」

リリム

「ん、お♪、お♪、お♪、主人様あ♪」
主人様あ♪」

リリム

「好きです♪ 大好きです♪」

リリム

「どうかこのままあ♪ んほおお♪ 思いつき
りい♪ わたくしのケツ穴にぴゅっぴゅしてく
ださい♪」

リリム

「さあさあ♪ ご主人様のチンカスザーメン♪
チンカスザーメン♪」

リリム

「って、んほおお♪、おおー♪」

リリム

「イグー♪ ケツ穴イグウ♪ ケツ穴イツ
ちやうー♪」

「おおお〜♪ イグイグイグイグイグ
イグイグ♪ イグイグイグイグイグイグイ
グ〜♪」

「ゼロ♪ ゼロ♪ ゼロ♪ ゼロ〜♪〜♪〜♪」

「ゼロ♪ ゼロ♪ ゼロ♪ ゼロ〜♪〜♪〜♪」

「ケツ穴イ……ツツぎゅうううづづづづう
〜♪〜♪〜♪〜♪〜♪」

「んほおおおおお♪」

「お♪ おほお〜♪ んあ……♪ やあ…
…♪ ご主人様のチンカスう……♪」

「んほっ♪ お……♪ お〜♪ はあ、
はあ……ああん♪ トプトプ注がれてますう
♪」

「はひッ♪ お……♪ お……♪ お……♪
お〜♪……♪」

「ん♪ ああん♪ ご主人様あ♪ どうか一滴残
らず出し切ってくださいませ♪」

リリム

「それぞれ♪ チンカスザーメン♪ チンカス
ザーメン♪ チンカスザーメン♪ チンカス
ザーメン♪」

リリム

「きゃん♪ ふふ♪ ああ♪ こってりした生臭
い香りがわたくしのケツ穴から漂ってきて♪」

リリム

「スン♪ スンスン♪」

リリム

「んほおお♪ やあゝん♪ 臭すぎますう♪」

リリム

「はあ、はあ♪ ん♪ せっかくご主人様からい
ただいた大切なザーメンを逃がさないためにも
♪」

リリム

「このまま暫く、おちんぼ様でケツ穴に蓋をさせ
ていただきますね♪」

リリム

「ああん♪ ご主人様あ♪ 好きです♪ 大好き
です♪」

リリム

「ご主人様のチンカスを食べながら愛し合う日々
は、わたくしにとってこれ以上ない幸せですか
ら♪」

リリム

「どうかこれからも、ご主人様の偉大なチンカス
ザーメンを食べさせてくださいね？」

リリム

「わたくしの愛しいご主人様♪ ん……ちゅ♪」
